

## 電子図書館における情報サービス

電子化の情報時代には、電子図書館はユーザーのニーズを最大限的に満足できるように、そのサービスを向上させなければならない。初期には、電子図書館の情報サービスモデルが伝統図書館の情報サービスから電子化とネットワーク化に変わったと見なされる。デジタル情報の処理技術が飛躍的に進歩するに伴って、伝統の文献情報からデジタル化の情報への転換を現実化し、その際には電子図書館の主な仕事は文献資源をデジタル化に転換したことであり、ユーザーにとって図書館が提供したのは、ただデジタル化された文献情報だけである。ウェブ技術とサービス観念という影響を受けて、その提供したサービスは受動的なものである。

現在、電子図書館の業務を運行する中で、次第に受動的なサービスモデルがすでにユーザーの情報ニーズを満たせないと意識される。それで、そのサービスモデルの完備を行うことが必要である。電子図書館の図書館員と其のユーザーとのサービス理念が変わって、図書館員がサービスの過程におけるユーザーの重要性を気にして、同時にユーザーにとっても必要な資料などを探すにあたって電子図書館の受動的なサービスによって自分の学習をする時間が占有されてしまった。もしも、ユーザーのニーズによって電子図書館が主体的に関連している資料を提供できれば、ユーザーに対して極めて大きな助けがある。その主体的なサービスの特徴は、ユーザーの個別的なニーズを考慮し、一般的に実現する形式が相互のウェブネット形式を通じることである<sup>1</sup>。具体的には二種のモデルに分けて、個性化の情報サービスとレファレンスサービスである。

### 1、電子図書館における個性化の情報サービス

情報サービスが電子図書館の主な狙いである。電子図書館の生存、発展、繁盛などが情報サービスには不可欠である。伝統の図書館は主に、その館内における収蔵した紙資料をユーザーに提供し、ユーザーが来ることを待っていたという受動的なサービス方式に属する。現在の開放方式の情報資源環境にとってそれらは非常に不十分である。電子図書館が強調するのは「ユーザーを中心にしてインテリジェント化の検索」というサービス方式であり、カスタマイズするサービスがそのサービス方式の魂である。そのインテリジェント化の検索とは、キーワード検索を実行すれば、そのキーワードに係る豊かな情報資料を掘り出せたり、ユーザーが自分の需要によって適切な情報を取得できることである<sup>2</sup>。すなわち、カスタマイズする需要を基にして生産を制定し、ネットワークを通じて的確に対応する性質を持っている動態の情報を伝播するサービスである。その特徴は、そのヒューマンインターフェース (human interface) がユーザーによって制定を求められる。すなわち、「人間とコンピューターなどの機械との情報のやり取りを媒介するキーボード・マウス・ディスプレイなどの入出力装置」<sup>3</sup>ということが、ユーザーの設定に基づいて制定できることである。

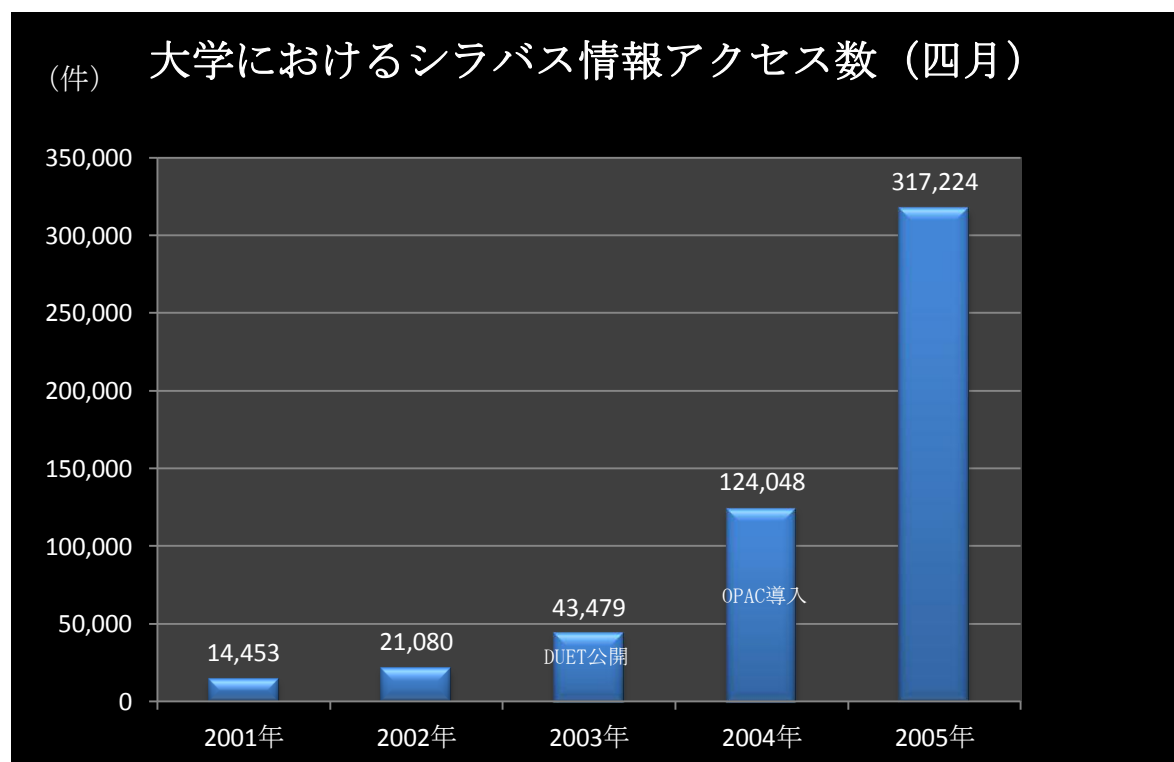
それによって、個性化の情報環境を建設し、ユーザーに適合的な知識単元を提供する。個性化の情報サービスの総合システムの技術に対して、相関専門家が提出した要求は主に、

可制御性、コントロールがある共有性、ユーザーのニーズの分析、ユーザーの情報データベース、情報の検索と取得、情報の組織と維持、アプリケーションや総体の支配部分などに集中される<sup>4</sup>。

今まで、中国における図書館の個性化のサービスに関する研究は、先進国と比べると、まだ初歩的な段階があって、応用の規模が小さく、応用の効果が明らかではない。この方面において先進諸国が遙かリードしていて比較的整っているシステムがある。例えば、My Library や My Gateway などである。My Library というものは、1998年にはアメリカにおけるコーネル大学が個性化のサービスのネットプラットフォームを開発したものである。そのシステムは個性化のリンク (My Links) と個性化の更新 (My Update) で、この両システムを構成した。すなわち、インターネットを通じてアクセスできる資料・資源・検索ツールなどをユーザーの書齋のように蓄積しておける<sup>5</sup>。それを使用し始めることから、とても良い社会成果と経済成果を獲得している。

近年、それは日本の大学、大学図書館にも導入されつつある。慶応義塾大学のメディアセンターも My Library というものを活用し、予約・取り寄せ・更新することができる。しかも、日本における大学図書館は既存の図書館が持ってきた機能や役割に加えて、所蔵資料やサービスの電子情報化を通じて「電子図書館」的機能や役割を果たさねばならなくなったといえよう<sup>6</sup>。以下の図<sup>1</sup>、図<sup>2</sup>この面での日本の状況である。

図<sup>1</sup>

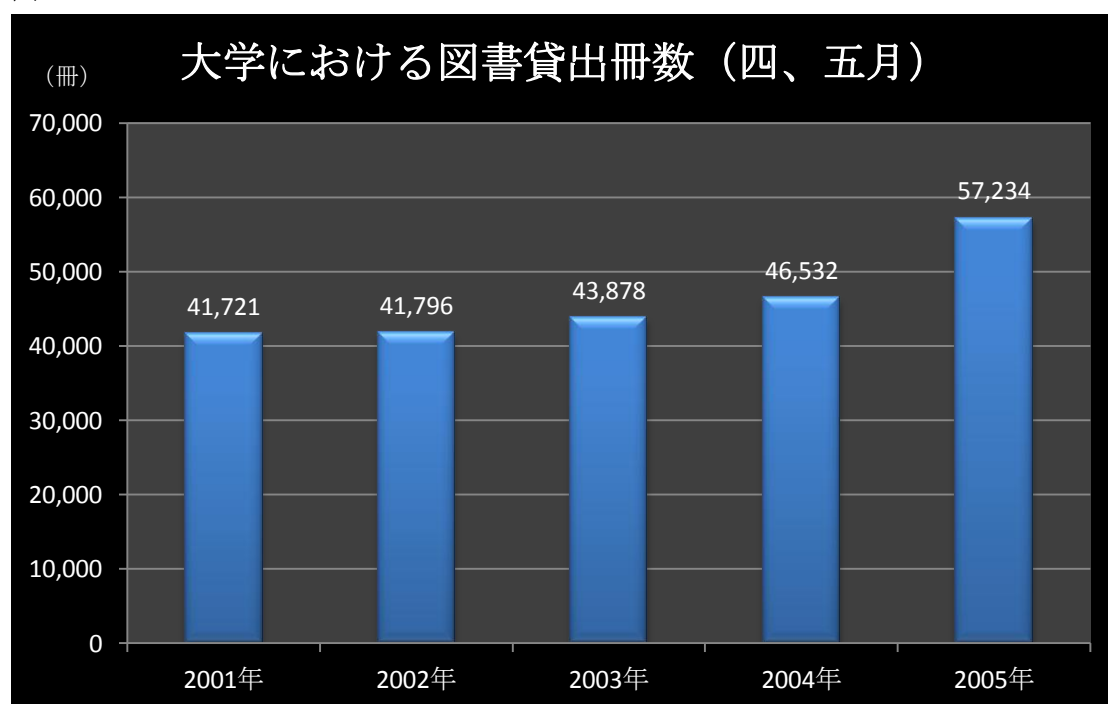


出典<sup>7</sup>: 『平成 18 年度「特色ある大学教育支援プログラム」申請書』をもとに作成した。

Microsoft と SAP 間の大幅な協力の産物である DUET というソフトには、様々なデータを集める機能が含まれる。したがって、以前の少数の関連している技能を持っているスーパーバイザーだけが実行できる業務機能は、今の情報の図書館員によって実行されることになる。ゆえに、図<sup>1</sup>から見ると、DUET 公開された 2003 年には、シラバス情報のアクセス数とその前の二年間と比べて顕著に上昇した。2004 年まで、OPAC (Online Public Access

Catalogue) 導入に加えて、システムが更に完全になって、ユーザーの検索は、もっと大きな範囲を覆うこととなる。情報技術が進むとともに、2005年のアクセス数も飛躍的に上昇した。

図<sup>2</sup>



出典<sup>8</sup>: 『平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」申請書』をもとに作成した。

同様に、当時の伝統図書館のデータを分析し、図<sup>2</sup>から見ると、従来図書館の貸出冊数が漸増している。したがって、先進国の代表である日本の躍進的な情報技術の下では、電子化の図書館サービスの個性化が明らかである。中国は情報技術及び電子図書館の個性化サービスを向上させる必要がある。

参考文献:

- 1、曲建峰, 楊宗英, 鄭巧英等. 『現代図書情報技術』2006.2 p.10-p.12 よりまとめた。
- 2、<http://www.atmarkit.co.jp/news/200107/19/ca.html> よりまとめた。2011.11.20 閲覧した。
- 3、デジタル大辞泉の中で、ヒューマンインターフェース (human interface) という言葉の解釈である。
- 4、徐一新, 王宏. 『中国医院管理』「数字图书馆的发展、建设与服务」2004.2 p.42-p.44 よりまとめた。
- 5、<http://mylibrary.ritsumei.ac.jp/mylibrary/> よりまとめた。2011.11.21 閲覧した。
- 6、「広島大学附属図書館の電子情報化の構想」  
<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/denshi/denshi.html> に参考した。2011.11.21 閲覧した。
- 7、『平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」申請書』より作成した。
- 8、同上。